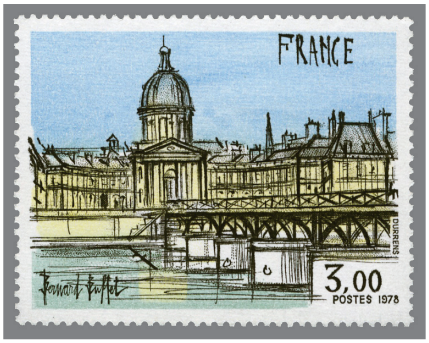
ポンデザール

フランス・パリ



フランス・1978年発行

ルーブル宮とフランス学士院を結ぶポンデザールの建設が始められたのは、ナポレオンが政権を確立した時代の1801年のことです。18世紀末以降、新しい素材である鉄が注目されるようになりましたが、早速適用されてパリでは初めての鉄の橋が1804年に完成しました。完成当初はスパン19m弱の鋳鉄製アーチが９連並べられていました。のち1852年に、左岸側の１径間が水門の工事のために撤去されました。

ポンデザールを訳すと芸術橋となります。橋の名前は、ルーブル宮が当時パレデザール（芸術宮殿）と呼ばれていたことに由来します。周辺が石橋ばかりであったセーヌ川に華奢な鉄橋が出現したため、市民には奇異に感じられたようですが、平らな橋面に設えられた板張りの歩行者空間の心地よさが人々に次第に受け入れられていきました。

19世紀後半から、車が通れる橋を望む声や、船の通航に不便だとする意見が強くなって、橋の架け換えが何度となく検討されましたが、保存を支持する声に支えられて、その形態が守られてきました。

1961年をはじめ、何度か船が衝突して橋は大きな損傷を受け、そのつど応急修理が施されましたが、1970年代後半には通行ができないほど危険な状態になっていました。橋の撤去も検討されましたが、議論の結果、セーヌの景観を保全するという理由で、復元されることになりました。

元の橋のデザインに忠実にほぼ全面的に造り替えられ、1984年に完成しました。現在の橋は、長さが155m、幅は10mで、スパン約22mの鉄のアーチが７連より成っています。

車に煩わされない心地よい空間を人々に提供しており、パリにはなくてはならない橋の一つになっています。特にイーゼルに向かう人の姿がよく似合っています。

近年、恋人たちが愛を誓って、高欄に鍵をかけることが流行し、そのために用意された仮柵が鍵の重みで壊れて通行に支障が出ました。少しばかりならほほえましいのですが、橋の一部が壊れるほどの量になると脅威になってしまいます。

撮影：松村　博